

橫溝正史探偵小説選Ⅳ  
目次

黒門町伝七捕物帳

江戸名所図絵

2

雷の宿

11

通り魔

34

船幽霊

56

宝船殺人事件

77

幽霊の見世物

98

お役者文七捕物暦

比丘尼御殿

.....

120

花の通り魔

.....

192

謎の紅蝙蝠

.....

263

しらぬ火秘帖

.....

311

【解題】野村恒彦

.....

464

## 凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

しらぬ火秘帖

## お鶴花丸

やよい三月なかばもすぎれば、江戸つ子じまんの玉川の水もぬるんで、六郷の堤もさくらの花ざかり。

その堤のうえを、きょうは朝から、ありのようにひとがつづく。若いものもいけば老人もいく。お坊さんもおれば女巡礼もおる馬もいけば駕籠もいく。

空にはピイピイとびが舞って、笛、太鼓のにぎやかさ。 「勘八、ちよつと見ねえ。さすがは新田様の二百七十年祭。いや、もう、どえらいおまいりだな」

こういったのは、堤へさしかかった道中すがたのふたりづれの、どこか目つきのするどい年かさのほうである。 ちよつどその年は、新田義興よしおきが矢口で討死してから、二百七十年目にあたっている、そこで、この春を期して、大祭がとりおこなわれることになったので、おまいりの多いのにふしぎはないが、しかし、きょうの出人には、もうひとつべつのわけがある。

「なあに、あにい、きょうのこのおおぜいの人出というのみながみな、神しんじんというわけじゃありませんのさ。お目当てはもつとほかにあるんでね」

「ほう、お目当てはほかにある……？ すると、きょうは明神様に、なにかかわったことがあるのかえ」

年かさのほうにたずねられて、若いほうが得意らしく、「そうですね、おまえさんは長いこと、江戸をるす

にしていなすつたから、知らないもむりはないが、こんど京から、はじめて江戸へくだってくる、玉村千之丞せんじゆうという歌舞伎役者、としはまだやつと十六か十七の、こどもだということだが、踊りにかけちゃ日本一だという評判です」

「ああ、千之丞が江戸へくだってくるという噂なら、東海道でみちみち聞いた。しかし、その千之丞がどうかしたかえ」

「さあ、その千之丞というのが、かねてから新田明神を、たいそう信仰していたそう。そこでこんど江戸へくだるにつけ、ついでといっちゃもつたいないが、さいわい、きょうのこのお祭。なんでも踊りを奉納するといふ噂だ」

「なるほど、日本一の千之丞の踊りが、ただで見られるというところから、こんなにおおぜいひとがいくのか」

「そうですね。いまだきの信心というやつはそんなものさ。だが、あにい、われわれもひとつ、日本一の千之

丞の、顔をおがんでいこうじゃありませんか」

「それもよからう。どっちみち、この人出を見ちゃ、ただではかえれねえよ」

顔見あわせて、にったり笑ったこのふたり、年かさのほうをえんまの仁三にみぞう、若いほうをいすかの勘八かんぱちといつて、すがたかたちは道中師だけれど、ひとかわむけばごまの、はいである。

きつと、きょうの人出をあてこんで、なにか悪事をはたらくつもりだろう、目くばせすると、そのまま、こそこそ、人ごみのなかにまぎれこんだが、ちようどそのとき、雑踏をさけて、鳥居のまえにとんと息杖をおろした駕籠がある。

「お鶴さん、お鶴さん、つきましたよ」

駕籠のなかへそう声をかけたのは、千草のももひきに印ばんでん、すがたかたちは一人まえだが、まだ、十か十一のこどもである。そのこどもに注意をされて、

「あら、もうついたの。あたしとろとろねむってしまつて」

と、くるまった小蒲団から、うっとり顔をあげたのは、まだ十四五のかわいい少女。

髪をおすべらかしにして、どこのお姫さまかと思われるようなすがただが、しかし、お姫さまにしては、お供

がこどもひとりとはふしぎであった。

えんまの仁三はひとごみのなかから、すばやくこの少女に目をつける、

「勘八、ちよつと見ろ。あれはこのお姫さまだろうな。かわいい顔をしているじゃないか」

と、つれの勘八のたもとをひけば、

「どれどれ」

と、勘八ものびあがり、つらつら少女の顔を見ていたが、

「おや、あの子にや見おぼえがありますぜ。どこで会ったけ。おお、そうだ。あれはちかごろ両国で、江戸の人氣をさらっている女かろわ軽業の一座のなかでも、とりわけ人氣のあるお鶴だ」

「なに、軽業師の娘だと？ ばかなことをいつちやいけねえ、軽業師の娘が、あんなごたいそうなりをするものか」

「いいや、ちがいねえ。ありやたしかにお鶴だ。ほら、見ねえ。駕籠のそばに小生意気な小僧がついているだろう。あれや花丸といつて一座のあいきようものよ」

「ほほう、するとやつぱり軽業師の娘か、しかし、軽業師の娘が、なぜあんなごたいそうなりをしているのだ」

「さあ、これにはきつとわけがあるんですぜ」

「わけもへちまもあるもんか。軽業師のぶんざいで生意気だ。おい、勘八、ひとついたずらをしてやろうよ」

「あにい、よしたがいいぜ」

「どうして……?」

「どうしてつたつてさ。あのお鶴という子はな。もと浪人の娘とやらで、こどもでこそあれ、武芸十八番ひとおりは心得ていようという、そりゃすばしい娘だ。うっかり、いたずらをしようものなら、ぎゃくにこつちがとんだ目にあいますぜ」

「ばかをいうな」

えんまの仁三はせせらわらつて、

「たかがこどもじゃねえか。まあ、おれの腕を見てろ」と、へびのような目を光らせて、すきをうかがつていようとは、お鶴はもとより花丸も知らない。

「まあ、ひどいほこりなこと。花丸ちゃん、その提灯をとつてちょうだいな」と、かわいあいあごをしゃくつてみせる、花丸は目をまるくして、

「なんだ。お鶴さん、このまっぴるまに提灯がいるのかい」

「なんでもいいから、とつてちょうだいな」  
お鶴にしかりつけられて、花丸はしかたなさそうにか

この棒はなにつつてある提灯をとつてわたした。

見るとそれには慶長十二年以来、通用禁止になっている、永楽銭がひとつ大きく、べつたり染め出している。紋どころとしてはかわつている。

### 花鳥堂幻阿弥

「いやだなあ、お鶴さんは、このまっぴるまに提灯ぶらぶらぶらさげてさあ。まるで判じものみたいじゃありませんか」

「生意気なことをいわないで、さきへおいで」

「だって、みんなこつちを見てわらつてるんだもの。」

おれ、小っぱずかしいや」

「ひとがわらつたつてかまうもんか。わたしちよつと、心願の筋があるんだもの」

「しんがんでなんだい。お鶴さん、なにかうまいもののかい」

「おっほっほ、あんなこといつてる。生意気なようでも花丸ちゃんはまだこどもねえ。なにかというと、すぐ、食べものなことだもの、やあい、花丸ちゃんの食いしんぼう」

「いやだなあ。そんな大きな声を出して……お鶴さんの意地わる！」

かわいい小ぜりあいをえんじながら、鳥居をくぐるとなかなかはいへんなひとごみだ。

両がわにはこの名物の、矢を売る店がずらりとならんで、三本五本と買っていく客もある。お社やしらのおくからは、神楽ばやしに下座の音。どちらもまけずおとらずにぎやかなこと。

「お鶴さん、千之丞踊りはあつちですぜ。おまいりやさきにするのかい。それとも、芝居のほうをさきに見ますか」

「ううん、あたし、芝居なんてどうでもいいの」

「あれ、お鶴さんは芝居を見たくねえのか。つまらねえ」

と、不平そうに鼻をならしている花丸をあとにしたがえ、判じ物のような提灯をぶらさげたお鶴は、さつきから、しきりにきよるきよる、あたりを見まわしながら、ひとごみのなかをもまれていたが、すると、そのとき道のかたわらから、

「お嬢さん、もし、そこへいくお嬢さん、お手の筋を見ましょう。運氣、縁談、待人、うせもの、なんでも当

らぬことはないという、銭占ないの花鳥堂幻阿弥、ちよいとお嬢さん。提灯ぶらさげたお嬢さん。永楽銭のお嬢さん。ちよいとここへおよりなさい」

と、立板に水と声かけられて、お鶴がはつとふりかえると十八か九の小坊主が、白布でおおうた見台けんたいのうえで、しきりにびた銭をかきまわしている。お鶴をよびとめたその目付きに、どこか尋常でないものがある。

お鶴はなにげなく、かたわらのかんばんに目をやったが、そのとたん、かわいいほおにさつと赤い血のけがさした。

そこには墨くろぐろと、銭占ない、花鳥堂幻阿弥としてあつて、その名のうえにべつたりとえがいてあるのは、まぎれもない、お鶴がぶらさげた小田原提灯に染めたのと、かたちもおなじ永楽銭の紋所。

お鶴はすいよせられるように、するするとそばへよると、

「まあ、銭易ぜにやすいつてめずらしいのね。ちよつとあたしの運勢を見てちようだいな」

と、しろい歯を出してにっこりわらったから、おどろいたのは花丸である。

「ちよつ、いやだなあ、お鶴さんてば、こんな坊主になにがわかるもんか。それよりはやくおまいりをすませ

て、千之丞の踊りを見にいきましょうよ」

と、たもとをひけば、お鶴はうるさそうにその手をふりはらつて、

「いいから、ほつておいてちょうだいな。それより花丸ちゃんおまえそんなに踊りをみたいのなら、ひとあしさきにいつてらっしゃい。ほら、おさいせんをあげるわ」

と、なにがしかの銭をつつんでやると、花丸はそうこ  
うくずしてよろこんで、

「うわつ、しめた。それじゃおいら、さつき見てきた、さざえのつばやき食つて来ようつと。踊りよりそのほうがいいや、お鶴さん。こころこいちゃだめだぜ」

「銭ひつつかんだ花丸が、ごくらくとんぼのように、ひとごみのなかに消えていくのを見おかつて、お鶴はずいと幻阿弥法師のそばへすりよつた。

「もし、お坊さん、それでは見てちょうだいな。待人よ」

「はいはい、お嬢さん、としはおいくつですかな」

「十六」

「うしのとしですな。ちよつと待つてくださいますよ。いま、すぐ見てしんぜます」

小坊主は器用な指で、さらさらと、六枚のびた銭をな

らべていたが、やがて、お鶴の顔を見なおし、

「お嬢さん、おまえさんの侍人は、ひとり、ふたり、三人、四人、五人……ですな」

「え？」

「しかも、おまえさんはその五人とも、名まえはおろか顔さえ知らない。新田明神の二百七十年のお祭に、ここで会おうと親の代からきめてあつた約束ごと、どうだ、お嬢さん、それにちがいますまいが」

幻阿弥の目がするどかつた。お鶴はその目に射すくめられたように、ぞつと肩をすくめながら、

「はい、あの……それで、めぐりあえましようか」

「さあて、ほかの四人はわからぬが、ひとりはずいにおうている」

「それじゃ、やつぱり……」お鶴はいきをのんで、

「もし、お坊さん、幻阿弥さんというのね。おまえ、そうかえ」

「お嬢さん、あれを持つていなさるか」

幻阿弥が、意味ありげに、お鶴のさげた提灯に、べつたりと染めぬいてある、永楽銭のほうへあごをしゃくつたときである。ひとごみにおされたのか、いきなりどんとお鶴にぶつかったおとこがある。

「おっと、こいつはすみません」